令　和　4　年　度　事　業　計　画

「RASA-Japan の理念と行動基準」及び定款第５条に規定されている「特定非営利活動事業」に従い令和４年度の事業を展開する。

しかし、世界中で蔓延している「新型コロナウイルス」の感染拡大防止活動の呼びかけの影響を受け、事業推進に影響することも考えられる。その場合には理事会で対応を協議することとなった。

（１）学校等の教育施設ならびに生活支援施設建設事業

令和４年度の建設計画は現地の自治体と活動前年度即ち令和３年度中に細部に亘る計画の立案を終了していなければならないが、立案のための協議がコロナ禍により渡航が出来ず話し合いが持てなかった。

従って、「令和４年度の学校建設活動」は中止せざるを得なくなった。

（２）栄養障害児救済事業

前年に続きサウスビル１小学校がコロナ禍の影響で閉鎖され休校が続いている。

このため給食支援活動もおのずと中止せざるを得なくなった。

令和３年９月から給食に代わる「食材・食品の配布事業」を２週間に１度の周期、頻度で学校が選定した貧困家庭児童 140 名に米５キロをはじめ缶詰、粉ミルク、卵などを配布している。

現在はコロナ禍の影響で学校がいつ再開されるか見通しが立っていない。

現在給食に代わって推進している「食品配布」を給食再開まで継続していく。

（３）ボランティア派遣事業

日本から大学生を中心に希望者を募り学校建設には約３５名、給食活動には約１３名のボランティアを派遣している。RASA のボランティア参加学生は圧倒的に女子が多い。

建設作業は女子学生にふさわしい作業が少ない。それでも参加して良かったと感じて貰うためには建設作業以外で満足感を味わって貰わなければならない。

RASA は活動が小学校という環境を活用した活動を見つけ出し定着させてきた。そして学生は勿論学校も子ども達も満足いく思い出深いボランティア活動になったことには間違いない。日本語指導の基本にのっとり 50 音表等を作成して実施開催したい留。

折り紙や日本語の歌やゲーム等では遊びの延長でしかない。きちっと基礎を身に着けて正式な日本語を教えてきた。その成果は学校の先生方も認めてくれている。ある学校では 6 年生にとどまらず 5 年生にも 4 年生にもと対象拡大を要望された。RASA のボランティア活動の骨子は次のようである。

宿泊・・・活動地周辺に一人一家庭にホームステイ。(異文化の交流)

作業・・・建設、給食共に現地の指導者の指示に基づき活動。

日本語教室・・・学校の要請もあり 5, 6 年生の児童を対象に学生が作った資料（50 音表など）での授業。ホストファミリーの家族の一人となって、寝食を共にすることによって英会話力がつく。

近所の人々との日常の交わり、日常生活を学習ができることに学生たちは大きな喜びを感じている。

帰国後、多くの学生が春休みや夏休みなどの長期休暇中に単独で、あるいはボランティア仲間と連れ立ってホストファミリーを訪問している。彼らはホストファミリーを再訪することを”帰る“という。

それだけホストファミリーの懐かしさ、親しみなど特別な感情を抱くのであろう。中には 2 度や 3 度も“帰った”人もいる。まさに第 2 の両親、家族であるという。日本語教室ではボランティア学生が現地の学校の教壇に立って子供達に日本語を英語で教えるという体験は、RASA でなければできない大変貴重なプログラムである。約５０ 万円以上をかけて欧米に語学留学の体験した学生からは RASA のボランティア活動に対する評価は高い。